

tab

No.
21

2
0
1
0
/
03
/15

後藤美和子 / 木村和史 / 石川和広 / 野村龍
秋川久紫 / 福島敦子 / 長尾高広 / 山岸満
タケイリエ / 岩田英哉 / 倉田良成

楯 = *Machilus thunbergii*

cont.

詩篇

- 後藤美和子・重荷／01
岩田英哉：セグロセキレイ／02
野村龍：（フルートの入った鞆を提げて……）／03
長尾高弘：よみがえり／04
タケイリエ：海雨山土／05
石川和広：お空から空へと、道の先に／08
福島敦子：癒されたい病／11
倉田良成：たゞありあけの——私の小倉百首から／13

文

- 山岸満：アートに出会う 伊庭靖子展「まばゆさの在処」／15
秋川久紫：「現在の性の拒絶」ということ 其の貳／16
木村和史：ブルーベリー2／19
倉田良成：譬喩ということ／21

あとがき集／23

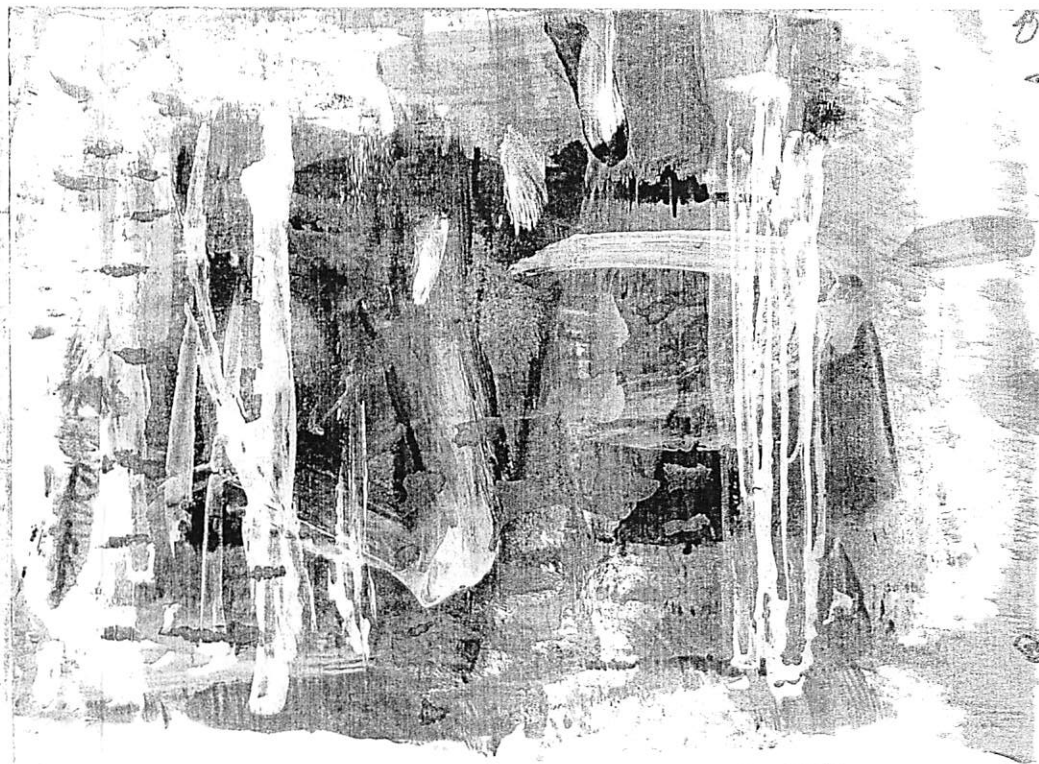
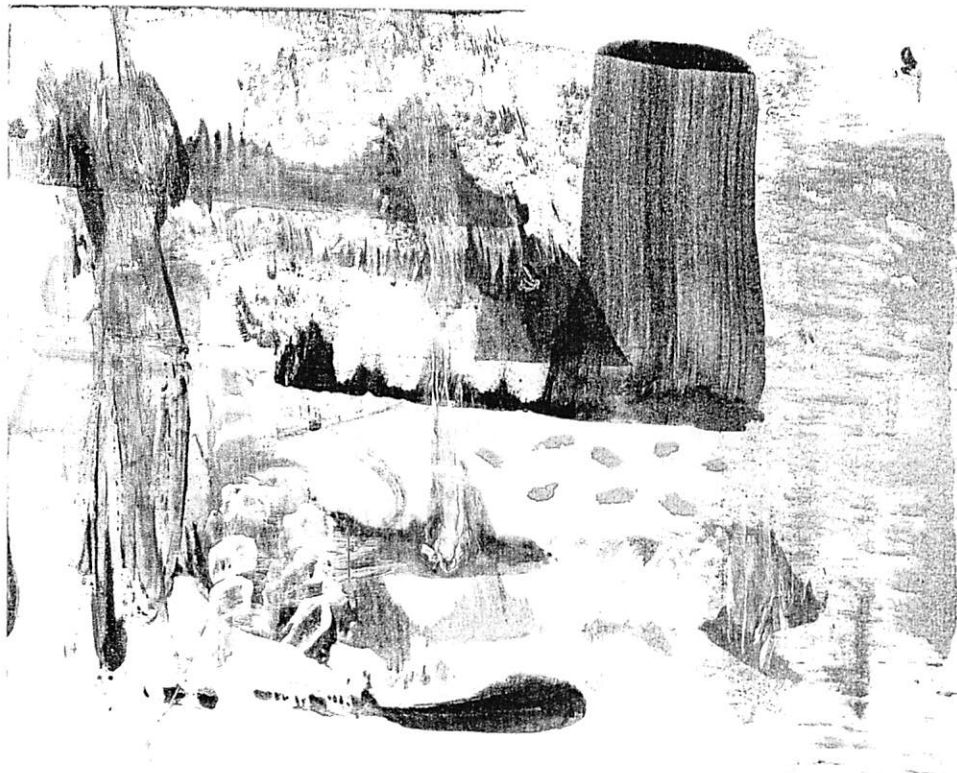
画：和田彰

tab 第21号／2010年3月15日（毎奇数月発行）

編集発行人／倉田良成

〒230・0078 横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷ハイツ 201

Eメール／kateis11@k3.dion.ne.jp



Handwritten text on the right side of the page, oriented vertically. It appears to be a list or notes, possibly related to the artworks. The text is difficult to read due to its orientation and cursive style, but it seems to contain several lines of text, possibly including names or dates.

2010

Symphonische Adaptation 1965

後藤美和子

重荷

少し早口でしゃべる

違う、違うと三回言う

この朝の決闘に

髪の間も口ひげの間も

白樺の中で風に揺れる

友人から新しい銃を借りた

弾は指先にかすかに触れ

血を流す

もつと大きな川だったなら

それは贈り物であつたのに

指に小さな白い旗を立て

休戦の町を歩く

相手に的を託し

撃たれるまでの午前の時

預けた荷物を取りに行くのだ

(皆既蝕五二)

岩田英哉

セグロセキレイ

朝、大学の中を通る

校舎の小さな窪んだ空間の下

石畳の上に、一羽のセグロセキレイが

ぴよんぴよん跳ねて歩いていて

いつも惹かれて足を止める

わたしたちだけだ

木々の青い色だけが雪のように降ってくる

鳥の啼き声が幽かに聞こえる

わたしたちは遠い

とその時、不意に気づいたので

魂は闇の中に輝いている、と

February 13, 2010

野村龍

(フルートの入った鞆を提げて……)

フルートの入った鞆を提げて

少女の時間は髪を靡かせる

朝 暖かな雨が光を洗う

残り香が勢いよく坂を下りていく

金貨五枚の入った革袋を鯨が飲み込む

キリストには臍の緒があつたのだろうか

隣の部屋の机の上に

数式が刻まれた竜巻が積まれている

《スープが出来上がりました

みなさん冷めないうちにどうぞ》

草原に沈み込んだ詩人を探り当てて

風の命は終わる

董色の歌

静かな星

羊皮紙に綴られた翼を取り出し

虹を三度潜る

(初出 『樹韻 第2章 梅』)

よみがえり

店で鍋の世話をしてくれていた

お姉さんの名札を見て、

亡くなった知人のことを思い出した。

四、五日前に

顔だけ思い出して、

どうしても名前が思い出せなかった。

深く行き来があったわけではない。

年齢とか、家族構成とか、勤め先とか、

そういった形ばかりのことしか知らず、

亡くなったのを知ったのも、

しばらくたってからだった。

ただ、こちらが勝手に好感を持っていた、

という、ただそれだけのこと。

亡くなったと知っても、

知らせてくれた相手に、

そうですかと言うだけだった。

それでも、顔だけ思い出して、

名前が思い出せなかったときは、

気がとがめた。

彼はもう文句も言えないのに、

ずいぶん薄情じゃないか。

楽しい時間をくれた人だったのに。

だからかどうか、

記憶の中に名前がよみがえってきたときには、

自分でも不思議なくらいの

充足感があった。

よかった、

生きていた。

こちらの勝手な思いでしかないのだけれど

タケイリエ

海雨山土

内海を裏切った影が

島のうらがわにまわって 隠れた

わたしは浜と向きあい

波は つぎつぎと押し寄せて

水平線から舌が這ってくる

そのようできて実のところは

爪先を舐めにやってくる

それは とても冷ややかな光景だった

わたしは剥かれてゆくために

半島を伸ばしてゆく

それしかすべは無く

あたらしい島が生まれるのと違い

あたまを残し からただけ

順調に伸びてゆくので誰も困らなかった

ひとが困らないのは 善いことだった

伸びていった半島から

その先は連のすきまを埋めるように

山のなかへと及んでいった

道のかなめには

水がこんこんと湧いていて

それだけがいつとう こころづよかった

わたしの背はやたらと重かったが

背中のもものが小枝を手折って

道に落とすようなことはしなかった

そして道の半分を脱ぎすててしまつて
おりかえしの川沿いへと行きあたつて

熊を狩る真似をする男が

苔のはえた石を蹴りつづけていた

それは 見なかつたことにした

熊なんて

一度も出た試しがなかつたし

男はいつも本気の演技をみせるが

みせかけだけのまがいものだったから

恐れるに足りん とわたしは知っていた

わたしは鈴のようにりんりん鳴っていた

とは言つたものの

わたしがからだをゆすつても

きれいな音は でない

そのうちに時雨れてきたので

木の根元を狙つて選り

とにもかくにも早口で歩いた

わたしはそうして分裂することができた

からだを残し あたまだけが

順調に分裂してゆくので困つたが

ひとが困らないのは 善いことだった

歩きまわっているうちに

六百年が茫々と過ぎていった

そのおよそ半分のあいだ

あらゆる手によつて殺されることに慣れ

のこり半分のあいだは 巡礼の旅だった
わたしはわたしを失ったことを
まだ じゅうぶんに知らなかった

それから二千年が過ぎて

わたしはようやく復元され

愛らしい名でよばれるようになった

わたしはわたしに溶け合ってゆき

涙みたいにぼろぼろこぼれおちた

土の中にすいこまれる

それだけのために

首からつまさきにかけて

ひとしずくになって傾いでゆくことを

覚えたのも このころだった

*文中に金子みすゞの詩を引用した箇所があります。

お空から空へと、道の先に

かつて僕にはたくさんさんの神様のなものがいたように感じる。神様は「様」というのだから自分よりエライもののようなのだ。が、「的」をつけたのは神様自体をイメージでしか知らないからだ。しかしそれらは子供の頃に比べてどうも減っているようなのだ。

中でもおじいさまやおばあさまやおとうさまやおかあさまは神様のなものの代表格だ。おじいさまやおばあさまは様々な力をもっているように感じられたのだが、彼らは唐突にあらぬ何かの摂理のように存在しなくなった。感じた記憶はあってもそのものは存在しなくなった。彼らは素敵でいい匂いで、全ての暖かさであり、同時に苦しいものでもあった。同時に怨念や恥や、存在のくるしみでもある。そこにそうしていることで、その人たちは何かを伝えていたのだ。例えばそれは暖かいガラス戸の向こう側のストーブを焚いた部屋のような、傍ににいるのに異なる次元にいた。それらが存在しなくなった分、それで辛いかといえば一概にそうともいえないので、あの人たちはどこにいつてしまったか知らない。ありていにいえば死んでしまったのだけれど、それにより私はえらいものを失ったのではなく、えらいものが死ぬことでそれらは自分の身体の中に吸収され、自分がちがう場所に来たように思えた。おかげで自分も次のえらいものになる順番が来たのか、いかにも寒々しく、しかしそれはごく自然なことだ。えらいとかえらくないとかいつているから感じが悪いが、そう感じてしまっていたのだ。それらの多くは消えていき僕がおじいさんに一歩進んでいく。それと並行してまた自分が消えてゆくように準備しなければならなくなったという事で、むしろちがう作業量は増えたのだから困る。けれど、昔みたいにも他の人におどおどするほど暇ではなくなりやがて、忘れてりどうでもよくなることが増えていくことでもあった。

大人の自覚もなく子もないのだが、少しずつそれなりに自分の存在をより薄れさせより働かせることを思うのだ。それは、ひとえに客観的にものごとをただ価値や勘定に加えずにこちらからあちらへ、自分の内側から外側へ移し変えることで、悲しいが自分を空っぽに

させることに近い。難しいことを考えているようで、省略される過程は増えた。ただ、それはそれでまあ悪いことでなく、気味の悪い苦惱、大きくならうとする苦惱がほぐれていくような、脱力した、自覚のない気分の良さを獲得していくことなのかな。加えて自身自身が喜ぶことよりも、自分とはちがう何かがよくこんでいる姿や美しさや喜びに自分がさせられるようなことなのかもしれない。相手に頼るのかもしれないが何者かがそれ自身であるようにひたすらに願うようになっていくこと、というのは大げさかな。

自分はまだおとうさまやおかあさまを失ってはいないし失うととても耐え難いのもかもしれない。たぶんそうだろうかとも感じる。でもそれは自分が神様を失っていく試練なので、致し方ないことかもしれないと思ってもいる。しかしそれは辛いことだろうと。それは遠かったお空が、「お空」から「空」になるようなことなんで、自分がそれに慣れられるかはわからない。いろいろ変わっていく中でついに変わらなかった景色がとうとう変わることもないだろうかって。その景色はどんなだろう。

わからないことは書きたくない性格なのだけど実際書いてきたわけだから、それも書いてみよう。

わからないと書いていたこと。夢や神様のことというより、次につながるようなこと。

たとえば話ではなくて。

たとえば話かもしれないけど。

なんだろう。なんだろう。己が首の下にある肢体をみよ。これでいいのだろうか。いいのだろうか。そのまま、毎日ご飯を食べ寝ることができればそれが幸であり、わざわざそれを多くの諸要素に分解する必要はない。呼吸し排泄して自分を分解し濃縮しているのだから。それは自分を殺すことではない。殺すことも生かすこともない。そのままのそれにおいて僕は、そのものだ。そのものが誰かを抱き、そのものが夜の道を自転車で走る。本当に暗い暗い、けれども黄昏をすぎた空が見える。

それはひとまとまりのひとつなのだから。それは他につなげられないと力が出ないように見える。電池を入れても僕は動かないのだから。システムですらないのだから。生き物が何かは知らないが、悲しいほどわからないのだが、生き物全体とこの僕は同じものなのか。僕と呼ばれるそれは何かを話し行なっているようだ。その目に天井が見えるようだ。僕は限界を毎日見ている。たぶんおそらくは毎日マシになっているというのに、追いつくことができない。が、よく考えれば大事なことで以外あまり追いつく必要がない。けれど、大事なことというのがあるのか。そう感じる時もある。全てがどうでもいいわけではないが、なんとかなるんじゃないか。ならないとしてもそれがどうなのだ。そのときにも僕は限界なのだろうか、それが狭められた道でも、それが自分を殺す者であろうとそれは僕を本当に殺すことができるのだろうか。そうなのだ。そうだけれども、無敵なのだろうか、僕はそんなことはない。それだけはわかるようなんだけど。

無敵ではないから安心するってことがあるのではないだろうか。限りがあつて、よかつたではないか。限りがあつてはじめて示される大きな、大きな海や空があり、そこには見たことのある魚もない魚も、見たことがあるうとなかろうと、それでいいような草花や、それで真実驚いて、ああここの山を登つて次のバスに乗つて、僕は行きたいところへいくことができ、行き先を具体的に決める力をもっているのではないか。

癒されたい病（いやされたいびょう）

鍼に通う

するとマッサージもついてくる

ざわざわと身体の中で何かがうごめく感じ

整体に通う 左右の足の位置が違うよ ゆがんでたんだな

アロマトリートメントに行く いい香り ふわふわ浮いてるみたい

これって脳がα波状態になったん？

岩盤浴に行く おなかの奥から照らし返されるみたいにあったかい

山奥の温泉に行く 大きな湯船に身体をしずめる

リンパマッサージに行く なんかすうっと流れていくのがわかる

リフレクソロジーに行く 痛っ！気持ちいい！

布団乾燥機にかけた温かい布団にもぐりこむ

はあ…やっぱり寝るのが一番ええわ

癒されたい

癒されたいために何でもする

癒し

癒し

癒し 卑し

いやしい言葉だ そんなに自分がかわいいか

そうだ 明日は

歩いて海を見にいこう

なみうちぎわで足を濡らし

流れ着いた木切れを拾ってこよう

癒されたい

癒されたい

癒されたいために何でもする

倉田良成

——私の小倉百首から

たゞありあけの

暁聞郭公といふ心をよみ侍ける

郭公なきつるかたをながむればたゞありあけの月ぞのこれる

藤原実定

ナガシマさんと出会ったのがいつのことだったのか、よく覚えていない。たぶん妻の仕事を通してのことだったと思うが、単なる仕事仲間とは呼べないことは、いっしょに初めて入った喫茶店で、昼間からビールで乾杯したという妻の報告からもあきらかだった。ナガシマさんは楽器販売という主な仕事のほかにも、小さなバンドというより楽隊といったほうがふさわしいサークルのキーボードをつとめていて、それで病院や施設などをまわったりもした。妻とはときどき飲んでいたが、私と初めて会ったときもやっぱりそんな小さな酒の席で、彼女は酒が好きというよりは、そういう席自体が好きなのだとすぐにわかった。私が進呈した詩誌をひらいてたちどころに誤植を指摘した。語るに落ちる私の駄洒落に、律儀にそれを上回る駄洒落を返してくる速さは電光石火だった。妻へのメールには、たとえば面長の上司の指示をしかつめらしく伝えた末尾に、馬の顔のデコメを添えるたぐいを常とした。彼女の髪はその齢の女性にしては少なく見えたが、過去に大病を患ったせいらしい。そのことと、彼女がボランティアで病院や施設を演奏してまわっていることは関係があるらしい。このときのビデオを見せてもらったが、男たちに交じっておそろいの赤いジャケットを着てキーボードを弾く彼女

の姿は、女らしいというよりは植物的な少年のおもむきがあって、どこか仮初めめいた感じがする。そのうちにほかならぬ私に、彼女が過去に罹ったのと同類の病がふりかかる。転移を繰り返したが、奇跡的に病院から家に生還したとき、お祝いに彼女が来てくれた。病が病だけに深く思うところがあるのだらうと私は思った。家の近くの店をはしごして飲んだ。少し過ぎてナガシマさんは家を出て独立したいと言った。妻と私も少し過ぎていて、はなしの具合から彼女を泣かせる格好となった。ナガシマさんは家を出るにつき、まるで十五、六の少女のようなことを夢見ていたからだ。泣いたあとはまたけろりとしてかみそりみたいな機知と天使的な毒舌の彼女へと戻ったのだが。それから会わなくなってどれくらいたつだろう。妻のほうはあれからもちよくちよく会っていたようだが。あるとき妻が送ったメールにも年賀状にも返事が来なくなった。正月も過ぎたころ寒中見舞いの葉書が来て、それはナガシマさんの母親の代筆で、治療の副作用で人工呼吸器をつけることになり声を失った。手が震えるのでメールも打てないから母に代筆してもらった、と書かれてあった。急いでお見舞いに行ったがもう意識はなかった。声をかけ手をさすり、帰ったが、まもなく訃報が届いた。葬儀の日は真冬なのに麗らかで閑かだった。白い花にうずもれて彼女はいた。でもそれはナガシマさんではなく単なる遺骸だった。ほんとうのナガシマさんは棺の上のあの写真のなかにいる。毒舌のあとの少し気後れしたような笑顔。いつまでも仮初めのままで。

アートに出会う(6) 三月十八日

伊庭靖子展「まばゆさの在処」

作品に出会うときの原則をまず決めようと考えた。ひとつ、あらかじめ作家の情報は極力いれないこと。作家の展のカタログは作家の直接的なものを見るに止める。要するにやくたいもないわたしの感想である線言を記すのだ。此処からまず視ること、視線にうちよせる作品からの波にまず洗われることを期した。さて、波がひいたあとになにが残ったのか。

まず最初に眼に飛び込んだできたものは、クッションとおぼしきものの部分とその表面を覆う布の感触である。なによりもうけたインパクトは質感である。それは対象のもつ存在がいま、そこにあるという鮮明な驚きであった。この生々しい質感は一瞬写真かなとも見紛う描法にある。そこが鍵である。つまり意味性に還元しようとする一方の視線の力学にたいする抗力がここに、この描法にあるとおもえた。それは意味性に収斂しようとする視線にたいする抗力としての技法であったのではないか。そのことによつて意味性に還元しようとする視線の力場の堰きとめを意図していることはみてとれた。このところをもうすこし微細にみれば意味性が生じようとするその直前のところに視線を留めようとすること―つまり現在へと、現在性のみへと留めおこうとすることに。直截に描法はそう主張している。

さて、そうであるならば、わたしたちは会場で作品を前に常に視ることの現在にたちつづけることを作品の側からほんとうは強制されてつづけているのかもしれない。そこからさきの事を捉え返すとどうなるのか。いいかえるなら、もし伊庭の作品がもたらす印象が

描かれた対象の質感―じつはそれとても誇張されたものなのだが、視るわたしたちはそれと感ぜずむしろそのリアリティーさという次元に横滑りして感受してしまふ―ということに収斂されてしまふらうな、ということ。そのことは伊庭の望むこと、計算のうちだろう。視線のオートマティズムへと導く仕掛けが一枚のタブローに実現されているということである。ここに、この仕掛けの前で足踏みする位ならずがある。その仕掛けを計算する手立てを会場でかんがえた。どれでもよい。作品の前でまず立ち止まり、その作品のできる限りの最短の距離、つまり視る距離を詰めて視たのである。至近のところまで眼をちかづけると、いままで例えばクッションの一部とみえていたものがたちまち単なる色彩の分布に解体されてしまふ。このことをまずしっかりと眼にきざみこんでおくこと。それからゆつくりと眼を離し距離をとつてゆく。すると或る距離に達したときそれまでの色彩分布は、具体的なたとえばクッションへと変貌するようにみえる。このことは視覚の慣性なのだ。伊庭はこの視覚の臨界点を機軸にして対象、すなわち世界にてをかけようとしている。伊庭はたぶん、この視覚の慣性―生理のほとりへとくりかえし回帰しながらわたしたちの視ることの現在性にわたしたちを繋ぎとめる方法を模索しているとみた。

「現在性の拒絶」ということ 其の式

VI (承前)

その後、私はそうした美術界のヒエラルキーを敢えて無視して、出来るだけ作品を主体に展覧会を観て回るようになったが、時折画廊や美術館・博物館の企画展示、常設展示で眼にする物故作家の作品に触れるうちに、現在進行形で創作されている作品と、既に過去のものとなった作品との明らかな質の違いに気付くようになっていった。そして、物故作家のいくつかの作品の中には、現在の画家たちが束になっても敵わないような凛とした気品があり、あるいは画面の中で果敢な表現上の挑戦が行なわれており、心底感銘させられるようなものが少なくないことが理解されるようになっていった。

その最初の出会いは、上村松園の「序の舞」(1936年 東京藝術大学 重要文化財Ⅱ以下、重文)である。この作品はかつて二度切手の図案に採用され、宮尾登美子の小説の題材ともなったが、二三三×一四一センチの大画面に漲る気品は人別格Vとも言える有無を言わせぬ存在感を持ったものであり、初見の私は深い感銘を受けて作品の前でしばらく動くことが出来なかった。その後、同じ松園が六条御息所の生霊を描いた「焰」(1918年 東京国立博物館Ⅱ以下、東博)の情念の描写の凄まじさと、華やぎのある清澄な唐美人を描いた「楊貴妃」(1922年 松伯美術館)の幻視の裸体表現に息を呑み、私の中で彼女は「未婚の母」の伝説とともに不動の地位を占めることとなった。

その他の画家で、当時の私とその作品の放

つゝ気Vとも言うべきものに強く魅かれたのは、松園の師でもあった「斑猫」(1924年 山種美術館 重文)、「蹴合」(1929年 大倉集古館)など、主に動物絵の傑作を残した竹内栖鳳、その弟子で味わい深い連作「奥の細道句抄絵」(1974年 京都国立近代美術館)を吟じた小野竹喬、そして銀箔地に群青のみで描かれた奇跡の傑作「漣」(1932年 大阪市立近代美術館建設準備室)(未見)を提示した福田平八郎など、いずれも京都画壇を代表する洒落な作風で知られる物故作家たちであった。

VII

それから私は、美術全集を見た印象や美術書などによって得た知識などから、同じ京都を拠点とする江戸前期の巨匠・尾形光琳の存在を意識するようになり、同時に光琳が私淑した琳派の創始者で、今や私が最も敬愛する画家となった桃山末期から江戸初期に活躍した俵屋宗達の存在を非常に大きなものと感じるようになっていった。そして今思えば、その頃にMOA美術館で開催された『尾形光琳展』に合わせて美術雑誌の中で特集を組んだ際に、琳派研究の第一人者であった美術評論家の山根有三氏と、「千羽鶴」(1970年 東京国立近代美術館)を始めいくつかの琳派的な作品を残した日本画家・加山又造との対談を企画したことが、私にとって一つの大きな契機となったのである。

対談終了後、私は山根と一緒に上野公園を歩きながら、少しの間話しを聞く機会に恵ま

れたが、そこで山根が語ったことは正に度肝を抜かれるような内容であった。山根はついさつきまで対談相手として話していた当の加山の絵を「琳派の画家たちの絵と比較すると、論外と言ってもいいほどお粗末なものでしかない」と、吐き棄てるようにこき下ろしたのである。私は対談の収録中穏やかに話していた山根の様子を見ていて、恐らくは加山の絵をある程度は評価しているものとはばかり思っていたので、これにはさすがに驚くと同時に、美術の価値判断に関して強く覚醒を迫られたような気がした。

この山根の言葉を聞いたことをきつかけとして、私は果たして「現在性」というものの価値がどれほどのものなのか？　と思うようになっていった。その頃には、自分なりに美術界のヒエラルキーの虚飾性は充分知り抜いてはいたものの、作品そのものの価値という点では、未だ「現在」にもそれなりの意味があるように感じていただけに、「現在」の価値そのものに疑念を提示するかのような山根の言葉は私の美術観・芸術観を大きく揺さぶったのである。ただし、未だその当時は宗達・光琳らの名品を実際にこの眼で観ていた訳ではなく、それは言わば単なる「予感」に過ぎなかった。その私の「予感」が「確信」に変わっていったのは、実際には美術関連の出版社を辞めた後のことである。

VIII

出版社を辞める直前の頃から、私は各地に散らばっている国宝・重文に指定されている古画・古美術を意識的に観ることを習慣付けるようになっていった。まず、手始めに首都圏近郊で観ることが可能な尾形光琳の「紅白梅図屏風」(MOA美術館 国宝)と「燕子花図屏風」(根津美術館 国宝)を観るために、各々の所蔵美術館に脚を運んだ。どちらの作品も写実の要素を持ちながら、そこに巧みなデフォルメが駆使されており、幾何学模様を思わせる左右反転対称の思い切った構図

は、まるで一つの異空間を見ているようであった。特に「白梅図」の老木の幹が画面の左側に出て観る者の想像力を刺激しつついつたん姿を消し、それがまた画面に中に戻って来て左上から右下に垂れ下がり、さらにまた屏風の中ほどで上方に弓なりに折れ曲がる描写は、心憎いばかりに巧みな洒脱さを持ったもので、その円熟の筆遣いにすっかり魅せられてしまった。

それから、何と言っても大きかったのが、平成五年秋に東博で開催された『やまと絵』展で一挙に多くの国宝・重文に指定された作品を観たことである。そこで私は「鳥獣人物戯画」(平安・鎌倉 高山寺 国宝)、「餓鬼草紙絵巻」(平安 東博 国宝)、「地獄草紙絵巻」(平安 東博 国宝)、「伴大納言絵巻」(平安 出光美術館 国宝)、「源氏物語絵巻」(平安 五島美術館 国宝)、「伝源頼朝像」(鎌倉 神護寺 国宝)、「平治物語絵巻」(六波羅行幸巻) (鎌倉 東博 国宝)、「日月山水図屏風」(室町 天野山金剛寺 重文)、「俵屋宗達「源氏物語関屋滯標図屏風」」(江戸 静嘉堂文庫美術館 国宝)、「尾形光琳「風神雷神図屏風」」(江戸 東博 重文)、「酒井抱一「夏秋草図屏風」」(江戸 東博 重文)など、我が国を代表する日本画の主だったものを観る機会に恵まれ、今に遺された美の造形の豊かな水脈を感じ取ることが出来た。古画の魅力に触れたことで「現在性」の価値の否定に向おうとする私の「予感」は、もはや「確信」に向い始めていた。

IX

その後、待望の主たる宗達画の実物を観るために何回かに分けて京都に赴き、三十三間堂の東側にある養源院で「松図襖」(1621年頃 重文)と「白象図」「唐獅子図」などの八枚の杉戸絵(重文)を、建仁寺で「風神雷神図屏風」(国宝)を、京都国立博物館で「蓮池水禽図」(国宝)と本阿弥光悦との競作「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」(重文)を、

醍醐寺で「舞楽図屏風」(重文)と「芦鴨図衝立」(重文)を観た私は、大らかにして自由闊達であり、豪快にして繊細さをも併せ持つ至高の表現を次々と扇面、絵巻、襖、屏風へと展開していった俵屋工房総帥の完全なる虜になってしまっていた。光琳も確かに抜群の技量を持った天才肌の絵師と言えたが、その光琳が時代を凌駕する大きさがあり、敢えて言えばJ・S・バッハやパブロ・ピカソに匹敵するとてもない巨大なエネルギーと技量の幅を持った屈指のアーティストであるように思えた。

その俵屋宗達が日本美術に与えた影響は計り知れず、光琳や酒井抱一、鈴木其一などのいわゆる琳派の画家だけに留まるものではなかった。近現代に入って、それまでむしろ光琳の影に隠れた観のあった宗達を再評価し、今日の宗達のポジションを確立した熱烈な信奉者たちがコレクター・研究者・日本画家などの各分野に登場することになるが、その中に「熱国之巻」(1914年 東博 重文)の今村紫紅と、「翠苔緑芝」(1928年 山種美術館)、「名樹散椿」(1929年 山種美術館 重文)の速水御舟、そして主に新古典主義と呼ばれる歴史画を描いた安田靉彦や前田青邨らがいたことを随分後になって知り、彼らが三百年の時を経て宗達に私淑していたことが分かって、私には妙に腑に落ちる思いがした。私がいも日本画家だったら、多分同じような心境になるだろうと思っただからである。

X

近現代の多くの名品や宗達を始めとする古画の素晴らしさ、スケールの大きさに触れた私は、やがてヒエラルキーに拘泥する現代の画家たちが現在進行形で創作している作品をリアルタイムで鑑賞する必要性をまるで感じなくなっていた。もちろん、国宝・重文といった文化財保護法にもとづく国(文部科学

大臣)の指定も、現在の価値観が生んだ過去を分類する際のヒエラルキーの一つに過ぎないとも言える。ただ、少なくともそこでは作者本人が既に亡くなっており、作品の処分に制限が掛けられているがゆえに金銭的価値に還元出来るものがない、ということが文化勲章等とは根本的に異なっている。乱暴に言ってしまうえば、現存作家に与えられる文化勲章等の「有償性」を持ったヒエラルキーが、そうした過去の文化遺産を守るために存在する「無償性」を特徴とするヒエラルキーに勝てるはずがないのである。そして、私は芸術が常により優れたものを創作することを一つの根源的な目的とする以上、最も注視すべきは「無償性の過去」であって、政治性と無縁ではいられない、猥雑物の多い「有償性の現在」にこだわらなければならぬ理由は何処にも無いのではないか、と考えるに至った。

それは、やがて私の芸術観の根幹を形成していくことになるが、私は詩の実作者の一人として、詩作においてもそれを援用し、現在書かれている詩、評価されている詩など、何ほどでもないと考えながら詩を書いている。敢えて名付けるなら、それは反時代的な「現在性の拒絶」とも言うべき思想である。(完)

ブルーベリー2

7月初旬、前の道をまっすぐ奥に百メートルほど行ったところに住んでいるOさんが、一輪車を押してやってきた。堆肥が山盛りに積んであって、その上にスコップが乗っかっている。

「畑をつくりましょう」

そう言って、トラック一台分の黒土をざっと均したばかりの、わたしの畑予定地に畝を作り始めた。Oさんは70歳を越えていて、腰も少し曲がっている。畑仕事をする人のようにはとても見えないのだが、温室でトマトやぶどうを育てていて、野菜づくりはプロ並みだとハスカップの老婦人から聞かされていた。ちなみにこちら辺では、ミニトマトは露地でも大丈夫だが、普通のトマトは温室でない現実がならないのだそうだ。

数本の畝ができあがると、樺切れに糸を巻いたものをほぐしながら、盛りあげた畝のひとつひとつに張っていく。糸には種がついていて、それを土に埋めるだけで種まきになるようだ。虫除け、病気除けの薬も込みこませているという。そのあと堆肥を一輪車からすくい取って、溝に点々と撒いていく。作業のあいだ、スコップを杖代わりにしていて、ときどき苦しそうに腰を伸ばしている。わたしはいつさい手を出さない。やりかけの大仕事を続けさせてもらう。

Oさんが最初にわたしのところにやってきたのは、ブルーベリーの女性と話した翌日だった。Oさんの斜め向かいに住んでいるAさんも一緒だった。

「Oです。昨日、妻がお邪魔した。」

それで、Oさんともしばしブルーベリー談義をすることになった。ブルーベリーに関心があるのは奥さんの方で、Oさん自身は薔薇に夢中になっているらしい。話を聞いている

と、奥さんに命じられてブルーベリーの苗をあちこちに移し変えたりする作業に身が入っているとは思えない。悪戦苦闘している薔薇の話になると、とたんに顔が輝き出す。

いずれはわたしも畑仕事や園芸に手を出すことになると思うが、今のところ、そのような余力はない。なにしろテント生活の真つ最中だから。それに、目の前の雑木林では、名前の分からない何種類もの小鳥たちがきれいな声で鳴いているし、強い風が吹くと、雑草だらけの隣地が草原のようになびく。白と黒の、生まれたてのように色鮮やかなセキレイが飛んできて、巣がつくれそうな場所でも探しているのか、ブルーシートの小屋のまわりをひらりひらりと舞い降りる。庭の代用品と呼ぶには贅沢過ぎるものたちに囲まれている。わたしがこれから作るうとしているものは、ほんとうは作られる必要などないのではないかと考えるほどだ。今のままで十分楽しい。徐々に家屋や庭の形が見えてきたら、逆に楽しさが色褪せてしまうのではないだろうか。すでにできあがっているものに、余計な浅知恵を加えるだけになりそうな気がする。

これから先、なにもないところにわたしが作り上げようとしているものが、いつまでも幻のままできてくれたら、楽しさもまた生き続けてくれるのかも知れない。

Oさんのところは敷地が800坪もあって、庭も畑も十分な広さがある。その分、芝刈りや草取りの苦勞が多いようだ。腰を痛めているというので、後ろを向いてもらって、二分ほど気を通してあげた。「整体を習っているもので」と自己紹介しながら。

こんなとき、素直に身を任せてくれる人と、警戒したりためらったりする人がいる。肩に手を置いて少し力を入れると、Oさんはなん

の抵抗もなく後ろを向いてくれた。

治してあげようと思っただけではない。どんな体になっていくか気になって、自然に手が出た。わたしの先生だったら、そんな軽はずみはしないような気がする。少なくとも、なんらかの覚悟を決めてから動くはずだ。全体の勉強が中途半端にしか身についていないわたしだから、少しは分かっているつもりになって、呼吸も整えないまま手を出そうとする。姉弟子たちにも怒られそうだが、でも、とりあえず他人の体に触ってみるのは悪くないかも知れない。他人を理解する、といつては大袈裟だが、他人とつながるひとつの通路にはなりそうだ。理解するために触るわけではないけれども。

Oさんの腰は左と右が上下にずれているように感じたので、揃った感じになるまで気を通して、手を離れた。それだけのことだったが、Oさんがわざわざ畑を作りにきてくれたのは、このときのお礼の意味があったと思う。「木村さん、腰が痛いのが一発で治ってしまいました」

翌日またAさんと連れ立ってやってきたOさんは、心底感嘆したようにわたしを見つめて言った。

それからしばらくのあいだ、Oさんの目にわたしは神の手の持ち主に映っていたようだ。残念ながら、その後何度か体をみてあげた結果に目覚しい成果がなくて、あくまでも、しばらくのあいだだけの後光に過ぎなかったのだ。

漁業関係の会社の社長をしているAさんは目が悪い。薄暗がりになるとほとんどなにも見えなくなるという。夏草が茂っている小川沿いの小道を散歩していて、恐怖で一步も動けなくなったこともあったそうだ。

まっすぐわたしを見つめて話すし、濁りや歪みなどの異常はどこにも見られない。目が悪いことを知ったあとになっても、景色の話や、小鳥が小さ過ぎてカメラに捕らえられない話などをして、あとではっとすることがよくあった。

ブルーベリーが目がいいという話になったついでに、ハスカップはもつといいらしいとAさんに勧めてみた。

「冷凍の実がありますから、持っていつてみませんか？」いや、木村さん、いろいろ試してみましたがもう諦めています。医者にも治せないんです」大きな声ではつきりと断る。

Aさんにしても、ハスカップをいかがわしいものと思っているわけではないだろう。自分にはすでに決めたことがあって、運命の責任をとる覚悟もできている、だから、試しになにかやってみるといような気分とはできるだけ離れていたい。そんなふうに思っているのかも知れない。Oさんの肩に触れたように、Aさんの目に触れることはできそうにない。秘められた意志の力にはじかれてしまいうさだ。

Aさんはその後、散歩の途中でときどき立ち寄ってくれるようになった。ひと足ひと足砂利道を踏みしめて歩くその姿を眺めていると、まるで意志の力そのものに動かされているように見える。

さつさと種を蒔いてさつさと帰って行ったOさんが作ってくれた畑は、夏の終わりになると大根、ニンジンなどがぐんぐん育ち、食べきれないほどの収穫となった。それ以上に、ふたりがしばしば話相手になってくれたおかげで、最初の年、わたしの孤独はかなり軽減されたと思う。

10月、霜が降り始めて、テント生活が厳しくなってきたころ、ふたりがぱったり姿を見せなくなった。Aさんも、散歩のルートを変えたようだ。

なぜか分からなかったのだが、どうやらそれは、わたしの仕事の邪魔をしないようにふたりで申し合わせた結果だったらしい。冬に迫られ、ひとりごとが多くなったり、刻み間違いに舌打ちしたりして、わたしの建築現場はおそらく、ただならぬ気配に満ちていたのだろう。

譬喩とということ

譬喩や隠喩に関して考えるとき、どうしても詩的修辭としての喩法という性格で考えがちであるのは致し方ないのかもしれない。そしてこのことは多く現代詩を俎上に載せる、というかたちで解説や説明がおこなわれる。

私自身、詩の初学のころはそうした、現代詩鑑賞、とか、詩人解説、とかを熱心に読んだものだ。あのころ、四十数年くらい前には詩が一般社会の中でもっと熱心に読まれていたし、たつとばれてもいた。高校生だった姉の書架から、村野四郎とか伊藤信吉などの詩の解説本を抜き取って、よく盗み読みしたものである。当時、現代詩といったら戦後詩を直ちに意味するのではなく、まだ大勢存命していた戦前から活躍した詩人の書くものが多いが、すなわち現代詩と呼ばれた（現に村野や伊藤などがそれにまさに当てはまる）。

言語に貴賤の別を設けなければ、戦前の詩と戦後の詩で、同じ日本語として見かけほど大きい深裂があるとも私には思えない。これを通俗的に荒地・列島以前以後、という言い方に変えてもよい。戦前と戦後と、また詩風ということでも対照的な二例を引く。

芝草に霜の降りたり
そらは海なりをみなぎらす
もはや別れなり
くらくして寒い冬がくるぞよ

（室生犀星「わかれ」）

空は
われわれの時代の漂流物でいっぱいだ
一羽の小鳥でさえ
暗黒の巢にかえってゆくためには
われわれの心が通らねばならない

（田村隆一「幻を見る人」）

畢竟言語である以上、「何」をあらわしているのかが問われなくては、という言葉が強すぎるなら、「何」をあらわしているのかが意識されていなくてはならないだろう。言葉が指示するものを意味と言うなら、この二例の意味には混濁がない。

問題はここに何かの譬喩を探そうとして、作品をためつすがめつ見ることはないのか。その結果、右の二例に天と地ほどの違いを感じてしまう。ちなみにこの二例に、模範解答のような譬喩はない。模範解答を仮に示すすれば、こんなようなものだろう。

星はこれいじょう
近くはならない
それで 地球の草と男の子は
いつも 背のびしている

（岸田衿子『あかるい日の歌』より）

ぴたりと着地の決まった詩である。ところが先に挙げた二例は、室生のはまったく譬喩のない直叙に近いものであるし、田村のは譬喩されるものが言葉自体を超出している結果、シニファイエ的な内容を脱落させている。譬喩の指示物が不明なのだ。

だが、私はここにも譬喩は存在すると考える。根源的に考えれば、譬喩とはあることを別のあることであらわそうとする機能である。光を水で、火を花で、たくましい筋肉を岩であらわす。これを一步進めれば、港を山嶺で、黒胡椒を弾丸で、宝石を鼠であらわすことだって可能だ。後者は主にシュルレアリスムの詩表現で多く見られるが、言語的事象としての夢や、世界中の神話で多く見られる事例であることは特筆するに足る。

あることを別のことに換えてあらわすのは、むしろ譬喩の専売特許なのではない。

そもそも言語自体、「あることを別のあることに換えてあらわすこと」なのだ。たしかフリーリップ・ヴェーゲナーという学者の説によると、発生時代の言語はすべてメタファーであって、その後いろいろ複雑多岐に組織化された言語体系は、いわば「色褪せた隠喩」であるのだという。発生時代については現在の言語学では考えずともよろしいというふうになっているようだが、この説は言葉を考える上でとても興味深い。われわれは「そのもの」、つまり「物自体」が「何」であるかを言うことができない。言われたことはことごとく「物自体」の譬喩でしかあり得ない。詩でも同じく、その曰く言いがたいモノを敢えて言うとき、即ち現実ということと言葉という幻に換えるとき、うごきひびくそれを心と

言うので、譬喩はもうそこから始まっている。そういう目で虚心坦懐に室生の作品を見ると、心にせまってくる迫真力の強さには並々ならぬものがある。この作品が書かれた大正期、まだ俗謡や江戸文学の口語の文化が残存して、ある種の伝統詩型として作品を担保する一方、「そらは海なりをみなぎらす」という行をよく見れば、これが周到で濃厚なメタファーとなっていることが理解される。この、メタファーに關しているならば、次の「もはや別れなり／＼くらくして寒い冬がくるぞよ」というくだりがあらわすのは、指示や告知なのでなくその指示や告知によつてうごきひびく心なので、「何」を意味しているかは一義的には言い難い。これは、言うなればメタファーないし譬喩の受容体とも考えられよう。

この譬喩の受容体という点から田村の作品を見てみると、まさに「譬喩されるものが言葉自体を超出している結果、シニフィエ的な内容を脱落させている」と書いたけれど、この「譬喩されるものが言葉自体を超出している」という事態が戦争のことかどうかいまは問わない。問題は「シニフィエ的な内容を脱落させている」ということが、室生作品と同じくメタファーないし譬喩の受容体的状態を

指しているということだ。ただし、室生の場合は担保されたものの形式の強さが内容物にまで及んで、対象をがっちりつつかんで放さないところがあるのに対し、田村作品ではその形式担保をみずから創りあげなければならなかった結果、詩的空間としては恐ろしく自由なさまざまな内容を飛ばすことができているが、これは同時に恐ろしい希薄さの中でおこなわれていることでもあるのだ。

総じて室生のほうが言葉は勁く稠密である。自由であることが不幸なことだつてあるのだ。ただし、田村が示した可能性の一つに「腐刻画」のような作品がある。ここには意味的な現実を飛び越えたものがあつて、禅の警策がもたらすような精神の覚醒を感じる。これはあることが別のことに換えてあらわされるというより、それらがいわば「衝突」する現象で、言語的な原初の分節に似てはいないか。

この男 つまり私が語りはじめた彼は 若年にして父を殺した その秋 母親は美しく 発狂した

この詞章の断裂にメタファーの元型があり、それは戦争の影というより、青年期特有の神話や永遠の匂いがする。

confidence

ピエール・ヴァネックが今月死んでしまつて悲しい。これまでではたいいてい、もう死んでしまつてゐる役者を好きになつてゐたから、好きな役者に死なれるのは初めてかもしれない。俳優というより、役者という言葉の似合う人だつた。生の舞台が見たかつた。(後藤)

3月になつてしまつた。何十年ぶりかで北海道の冬を過ごしたことになる。意外と平気だつた。昔よりずっと暖かくなつてゐるらしい。が、油断はしないようにしようと思う。まだ凍つてゐるし。(木村)

先日、初めて文楽を見に行つた。見に行つたのはよいのだが、結構寝てしまつた。景清の娘が、駿河からはるばる日向の国宮崎まで行つて、やつと父親と会つてからの記憶がない。気がつくと、娘はもういなくなつていて、景清が鎌倉の隠密に懐柔される場面になつてゐた。ありやま。それでも、文楽の空気というのは何となく感じてくることができたので、行つてはみるものである。(長尾)

私の住まいの最寄り駅地下2Fに、インターネットカフェが出来ました。今まで通つてゐた所は煙草の煙がひどかつたので、禁煙席がきちんとある、その新しいネットカフェに、私は通い始めました。ところが、地下2FでBGMも全くない2畳ほどの人工空間は、それはそれで問題があつたらしく、私はブースの中でパニックを起こしてしまい、3日3晩そこから出られなくなつてしまつたのでした。普段服薬している薬も体からすつかり抜け、離人症を起こした私は、地上のネットカフェ入り口に3時間ほどぼおつと立ち竦み、目の前の道路を行

き来する自動車や通行人を眺めていました。雲の降る、寒い寒い日でした。暫くすると、お巡りさんが2人、自転車に乗つて颯爽とあらわれ、私の前に自転車を止めると、1人は私の方へ、もう1人はビルの奥から出てきた警備員らしき人の所へ向かつていきました。私の方へ寄つてきたお巡りさんが、「何か身分証のようなものはある？」と私に尋ねるまで、私は、ビルの警備員さんが、私のことでお巡りさんと呼んだ、と言うことに気付きませんでした。いわゆる「職務質問」と言うやつですね。皆さんは、職務質問をお受けになつたことがありますか？ ないですよ。普通はありません。私は、離人症のせいで、お巡りさんと話をしていても全く現実感がなく、言われるがままに、ポケットのカード入れから免許証を出し、お巡りさんに渡しました。それをもうひと方が受け取り、無線で前科のあるなしを照合している間、私は、自宅の電話番号やら何やらを答えていたのですが、所持品検査をされなかつたのは不幸中の幸いでした。私の鞆のなかには、2週間分の向精神薬が、合法的であるにせよ、たつぷりと入つていたのですから！(野村)

春の日、野原に柔らかい芽を吹くヨモギを摘んでいると、指先が湿つてくる。新聞紙の上に広げ、ごみをとり除いて粉が絡むようにしてよく混ぜる。ヨモギのかき揚げを作り始めたのは小学生の頃だつたと思う。そのころ家は金持ちだつたから、食料難でもなかつた。その後、家は没落し、私にはその習慣だけが残つた。因果な話である。(タケイ)

じっくり自分自身の課題に取り組むのは、時間もその間を支える資源も、失敗も

必要です。自分の生の中心にあるテーマが何かはひとにより、様々でその濃淡もあることと思いますが、それをまず考え、生きてみるために仕事や生活があり、その仕事や生活が自分の実存に示唆を与えていく。仕事はそれぞれの人生の経過の中で見つけるものです。こういうことができる社会になつたら、問題は減るんじゃないでしょうか。ウエーバーは今世紀の最初の学生向けの講演で「日々の仕事に帰れ」といいました。浮き足立つてもどうにもならない。この場合の「仕事」は「sache」で翻訳は非常に難しい。もの、事柄、問題、本題、訴訟事件、物件、目標などと多彩な意味がある。自分なりに解釈すると目の前の本題、重要案件です。この「sache」は「Beruf」（つまり使命、天職、仕事）に打ち込む活動そのものを指していると思います。つまり自分は何者であるかを見る。そのときにたちあらわれてくるもの、本題（sache）です。天職に資する現実的な形のもので。ウエーバーは学生の浮かれた、似非インテリ風潮に苦言を呈したのですから、目の前の学問的課題に取り組みということでしょう。しかし我々の生活でもこれを拡張して捉えれば自分を基礎付けるもの、確かにすることに向かうということになりはしませんか。

（石川）

節約のためにハンドクリームを顔に塗ります。案外、これがいけるんです。化粧下地になります。勿論、服はユニクロです。本は図書館で借ります。そして節約したお金で鍼や整体やアロマトリートメントやリンパマッサージ等のところに行くのです。それを施術してくださる方々に言うとうけます。わたしはいいお客です。（福島）

私の詩が反時代性を持つていることを倉田良成さんだけでなく、最近久谷雉さんに

も指摘されました。そのことに関して自分なりに納得出来る説明をしたいと思い、多少挑戦的になることを承知の上で、前号と今号の散文を書きました。例えば宗達や光琳の金屏風、春信や歌麿などの浮世絵版画（Ⅱ過去）は、圧倒的な存在感を持つて私の日常（Ⅱ現在）の重要な部分を占め続けており、その状態こそが私にとって真にリアルなことなのです。（秋川）

所謂、団塊の世代が壮年を迎えた頃、社会の地平にせりだした新たな光景がみえる。つまりかれらの親の姿である。大なり小なり、かれらが親の「老い」と直面したとき、かれらが直面した状況は従来の社会からの漠然と考えられていたものとは全く違うとしかおもえないものだったのではないだろうか。つまり「古ヨリ学ベ^{グロウアップ}」というわけには行かない現実であつたとおもふ。狭くみても、わが列島においてヒトの生涯を相としてみても、基軸を変更せざるを得ないことの端緒がここに露頭しているとおもふ。ヒトの生涯をみると、「老い」と「死」が接続する時代がわたしたちのつい数十年前まであつた。そのときまでは「死」と「老い」は背中合わせのようになつていて、「老い」をするとき「死」を感じることであつたのだ。しかし、わたしたちの生きる今にはこの二つの間に大きな分断線が引かれてあるのだ。このときわたしたちの前に置かれてあることのひとつは、「老い」とはなんなのか。どう語られるべきものなのか、ということがある。このことはヒトの未踏の領域なのだとおもう今日この頃です。（山岸）

James Wright というアメリカの詩人の詩を読んで、真似をして書きました。論より証拠といたいところですが、証拠が証拠になつていくかどうか、甚だころもと

ない。とはいえ、魂は闇に輝いていると思
います。(岩田)

1月18日、オトマール・スイトナーが死
んだ。NHKの追悼特集で、最晩年のイン
タビューが聴けた。

へ…ステージに上がるとき、ためらいや
緊張は？

へ破滅するならしろ。と、自分に言い聞
かせて軽く会釈する…

20代の頃、ベルリン国立歌劇場横浜公演
で聴いた彼の『魔笛』が耳に甦った。合掌

—Symphonische Adaptation (1965) は、
パウル・デッサウ作曲『交響的変態』(初
演：スイトナー)。(和田)

正月からこの方、ずっと籠り生活が続い
ているような気がする。そのなかで、若い
人の傷ましくも亡くなることに逢着したり、
新しくまた別の若い人と出会って酒を飲ん
だりした、雨がちで寒い冬である。そんな
日々、このところ途切れ途切れだがずっと
継続してレヴィーストロースの『悲しき熱
帯』を読んでいる。この優れて感覚的な事
柄を論理の言葉で説明し、翻訳する驚嘆す
べき文体は、時に詩と紛らわしい。ふと見
れば周りは春意に満ちて、自分が飢える如
く音楽を聴くこと—それも生で聴くことを
欲していたのだと激しく気づく。(倉田)